

第20回 作業療法ジャーナル研究助成

小渕浩平氏の「作業療法士による住民互助型の移動外出支援サービスの効果と実践モデルの構築—3年間の縦断的アクションリサーチ」に決定



小渕 浩平氏

過日、第20回 作業療法ジャーナル研究助成対象選考会が開かれ、小渕浩平氏の研究が選ばれた。小渕氏の研究テーマは「作業療法士による住民互助型の移動外出支援サービスの効果と実践モデルの構築—3年間の縦断的アクションリサーチ」である。助成期間は3年間であり、助成金額は30万円である。研究経過については、次年の本誌に掲載する。

第20回研究助成を受けての言葉

小 渕 浩 平

(JA 長野厚生連 長野松代総合病院, 作業療法士/信州大学大学院, 博士課程)

このたびは、第20回作業療法ジャーナル研究助成にご採択いただき、心より御礼申し上げます。

私は病院に勤務する中で、脳損傷後に運転再開が難しい方々に対し、新たな移動手段や選択肢を十分に提示できないことに、専門職としてのもどかしさを感じてきました。地域に暮らす方々が、行きたいところに行けるようになり、より豊かな生活を送れるよう支えるには、医療の枠を超えた支援の仕組みが必要だと痛感し、2023年（令和5年）より行政・社会福祉協議会・住民と連携して、長野県小布施町で移動外出・付き添い支援「えべさの会」を立ち上げました。

本研究では、この実践を対象に、作業療法士が関与する住民互助型の移動支援サービス

の効果を、3年間かけて検証します。移動支援がもたらす生活や社会参加への影響に加え、活動を担う協力者のやりがいや心理的充足感にも注目し、地域に根ざした支え合いの姿を探っていきます。

また、本研究で得られた知見は、多様な地域や実践者と共有し、今後の取り組みに活かせるよう積極的に発信して参ります。さらに本研究は、地域における作業療法士の新たな役割を明確にし、専門職としての実践領域を広げる一助となることも期待しています。

小さな町の挑戦から、誰もが自分らしく暮らせる社会の実現に一步でも近づけるよう、真摯に、そして情熱をもって取り組んで参ります。